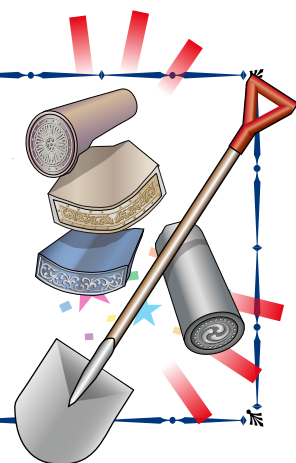


史跡西寺跡の発掘調査

調査期間：令和3年 11 月 15 日（月）～ 12 月 3 日（金）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1. はじめに

西寺は、平安京遷都（794年）に伴い、国家鎮護のために東寺とともに造られた官寺（国営寺院）です。九条大路に面して南大門を開き、その範囲は東西二町（約250m）・南北四町（約510m）に及びます。大正10年（1921）に土壇状の高まり（コンド山）を中心に国の史跡に指定され（現在の唐橋西寺公園）、その後の発掘調査で、南大門、金堂、僧房、食堂などを確認し、昭和41年（1966）には中枢伽藍が追加指定され、令和3年（2021）には新たに確認された五重塔跡が追加指定されています。39次に及ぶ発掘調査によって、朱雀大路を挟み、東寺とほぼ左右対称の伽藍配置であることがわかってきました（図1・2）。

京都市では、史跡西寺跡の建物配置等の確認と普及啓発を目的として、平成30年度より唐橋西寺公園内で範囲確認調査を実施しています。昨年度までの調査（35・36・39次）で、講堂跡の基壇や礎石、須弥壇を確認し、東寺と同規模と考えられていた講堂の規模が異なることが明らかとなり、創建当初から西寺と東寺の役割に違いがあった可能性が高まりました。

そのため、両寺の役割を具体的に示す伽藍について、共通点と相違点を明確にする必要が生じ、今回の調査では、両寺の伽藍復元図で異なる北僧房跡の位置及び講堂北軒廊の有無を確認することを目的としました。

従来、北僧房の位置については、昭和49年（1974）の9次調査によって確認した瓦堆積を北雨落溝と捉え、溝南側に並ぶ東西方向の礎石抜取穴3基を桁行の北側から2列目の柱列と判断し、東寺北僧房の位置よりも約4m北側に復元されてきました。その結果、北側に所在する食堂院との間に北小子房が存在する余地が無いと考えられてきました。また、北僧房の建物は、桁行の柱間3間で一房とし、総数30間と想定したため、中央間に通路（馬道）を設定できないことになり、講堂と北僧房を繋ぐ渡り廊下（講堂北軒廊）も復元されていません（図3）。

今回の調査の結果、北僧房の礎石根固め及び抜取穴を5基、雨落溝、北軒廊の礎石抜取穴1基と凝灰岩で化粧された壇上積基壇を確認し、西寺の伽藍復元図を見直す成果が得られました。

2. 調査概要（図4）

（1）北僧房（写真1）

礎石据付穴・抜取穴（1～5）

調査区北半で北僧房の礎石据付穴・抜取穴を東西方向2列の計5基（礎石据付穴・抜取穴1～5）確認しました。据付穴は直径1.5～1.8mの円形で、固く締まった土の中に径30cm前後の人頭大の河原石を置き、礎石の根石としています。抜取穴は、据付穴のほぼ中央にあり、直径0.7～1.4mのやや不整形の円形で、礎石の破片である花崗岩片や焼瓦、土器が出土しました。据付穴に残る根石の配置から、礎石の直径は1m強であったことがわかります。桁行（東西方向）の柱間は西から4.48m（15尺）、3.73m（12.5尺）、梁行（南北方向）は3.43m（11.5尺）です。雨落溝との関係から、梁行3間の北僧房の南より1・2列目の柱列にあた

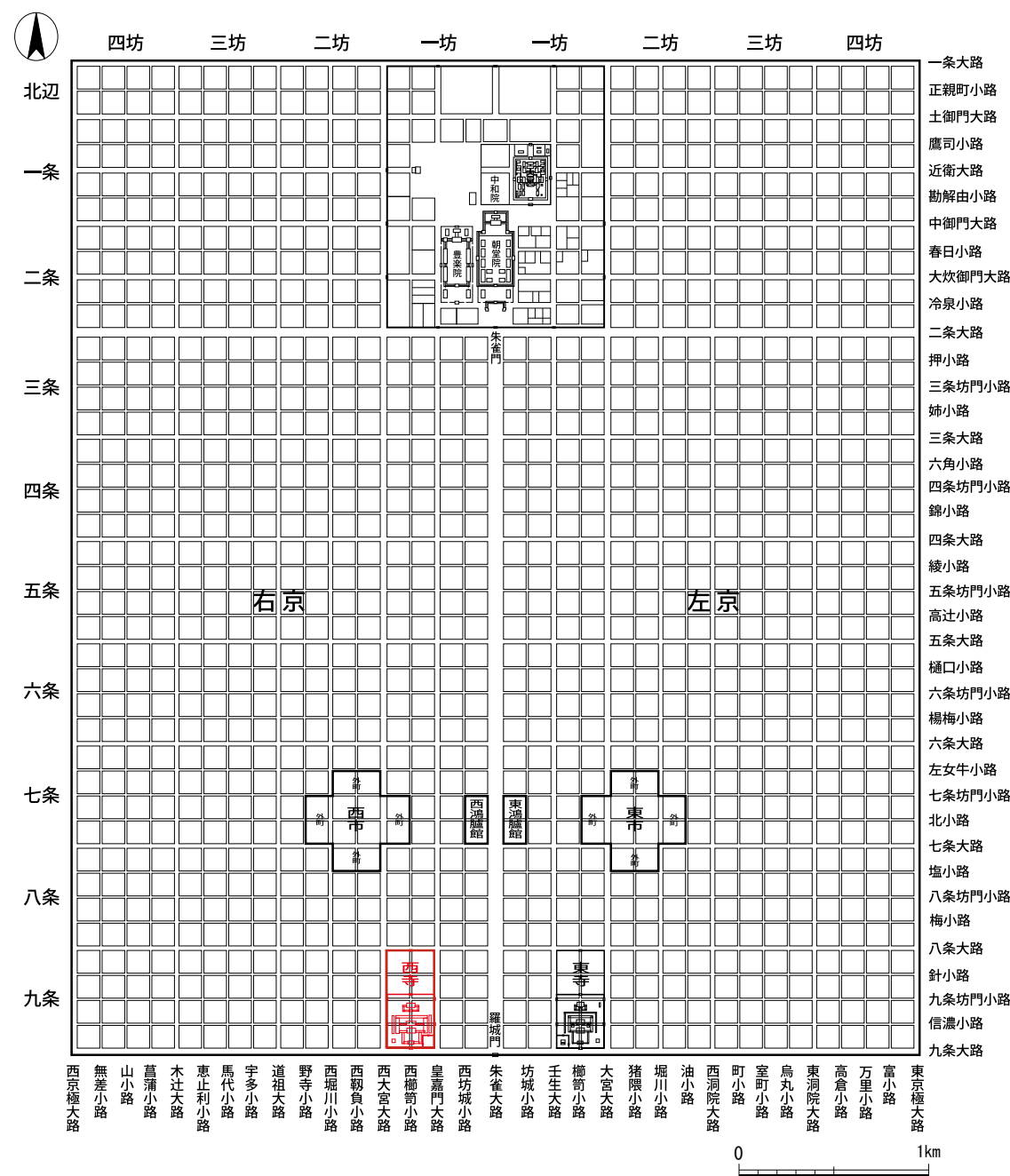


図1 平安京図

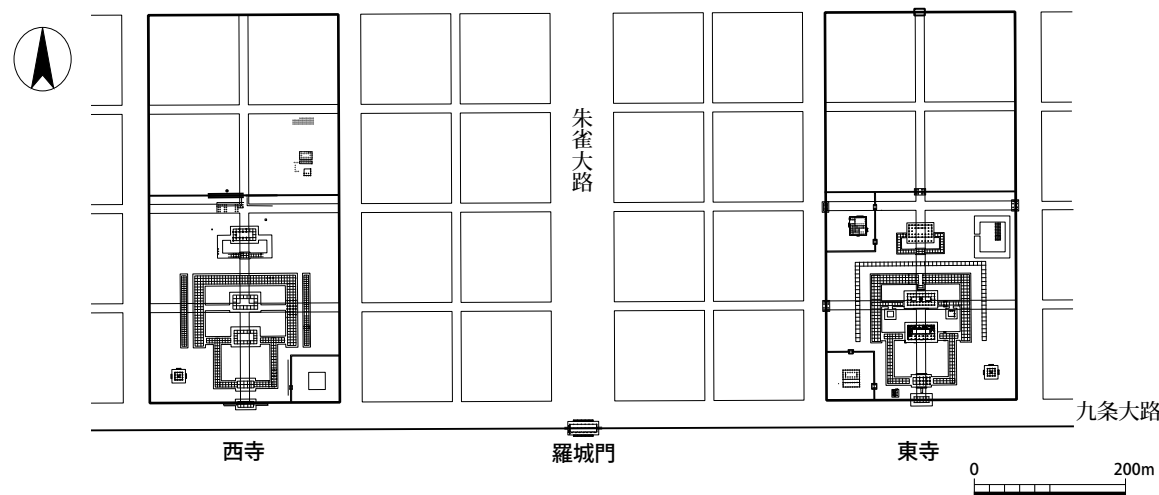


図2 西寺と東寺(S=1:10,000)

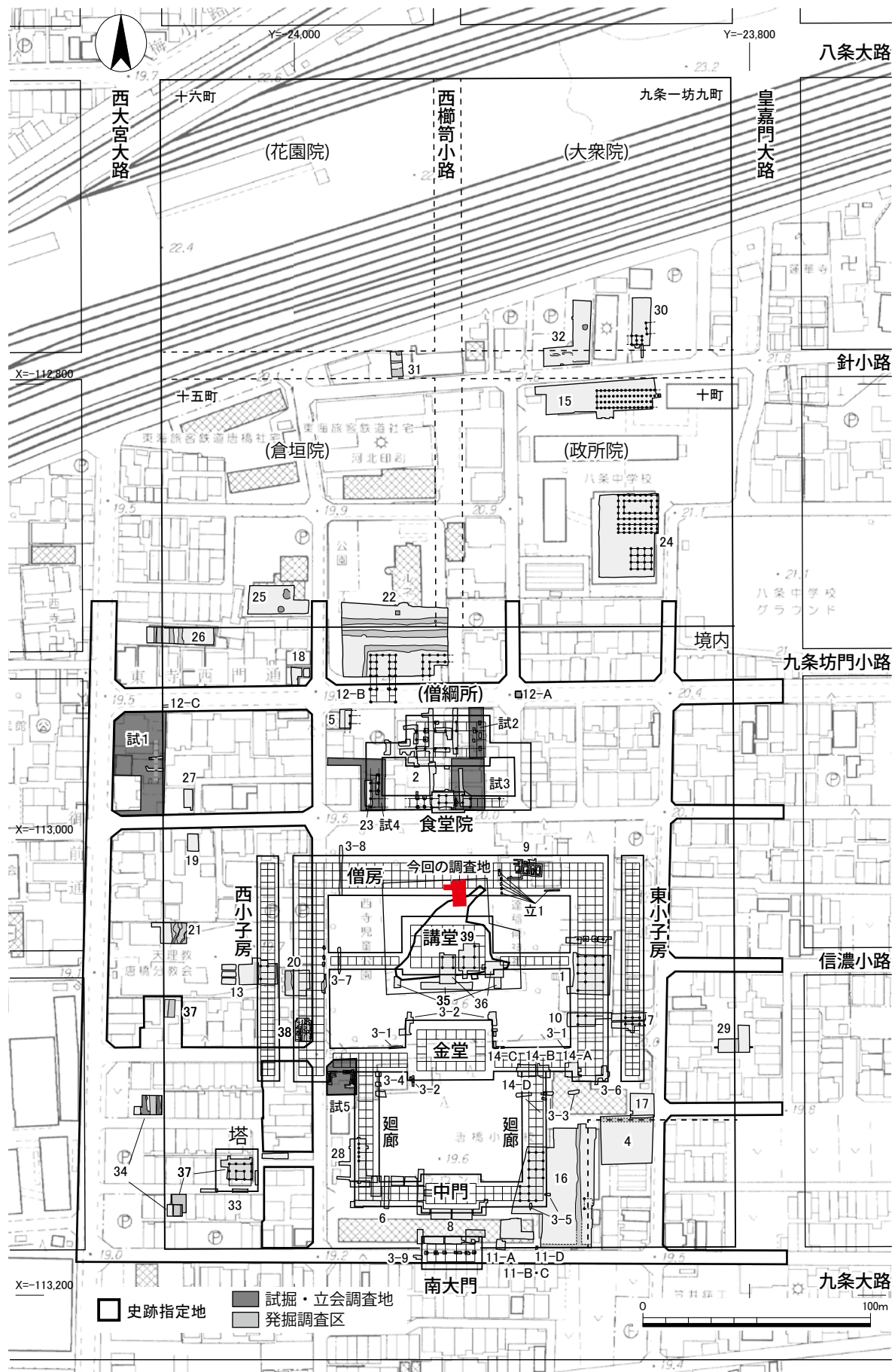


図3 西寺跡伽藍復元図(旧)及び調査区配置図(S=1:2,500)

ります。

南雨落溝(溝6)

調査区南東で確認した幅0.7m、深さ0.2m、長さ2.5m以上の東西方向の溝で、西端は後述する北軒廊東縁の凝灰岩列に接し、東は調査区外に続いています。溝底には平瓦片が敷き詰められていました。東西方向の礎石据付穴・抜取穴に並行しており、北僧房の南雨落溝にあたります。

(2) 講堂北軒廊

基壇(写真2・3)

調査区南西で、南北方向の基壇外装及び盛土を確認しました。

北軒廊東縁にあたる基壇外装は、壇上積基壇と呼ばれる最も格式の高い基壇構築方法で、凝灰岩製の地覆石、羽目石、葛石が残っていました。地覆石は幅0.2～0.23m、一石の長さ0.63～0.93mで4石分、計2.9m続いており、北は北僧房南雨落溝西端に接し、南は調査区外に続いています。羽目石は1石が残り、厚さ0.12m、長さ0.48m、高さ0.33mを測ります。葛石は1石が残り、後世に一部が割られた際に少し傾いていますが、ほぼ原位置を保っています。厚さ0.18m、長さ0.52m以上、奥行き0.5mを測ります。地覆石上面から葛石上面の高さは0.5mであり、軒廊の基壇高を示しています。

盛土は高さ50cmを測り、固く締まった土を積み上げて構築しています。南西隅には、創建当時の土間叩きの床面が残っていました。床面直上には、火災によって焼け落ちた多量の焼瓦が堆積しており、北軒廊が焼失したことがわかります。

礎石抜取穴(礎石抜取穴7)

盛土上面にて直径1.8m、深さ0.45m以上の礎石抜取穴を1基確認しました。埋土には焼瓦や焼土が含まれていました。

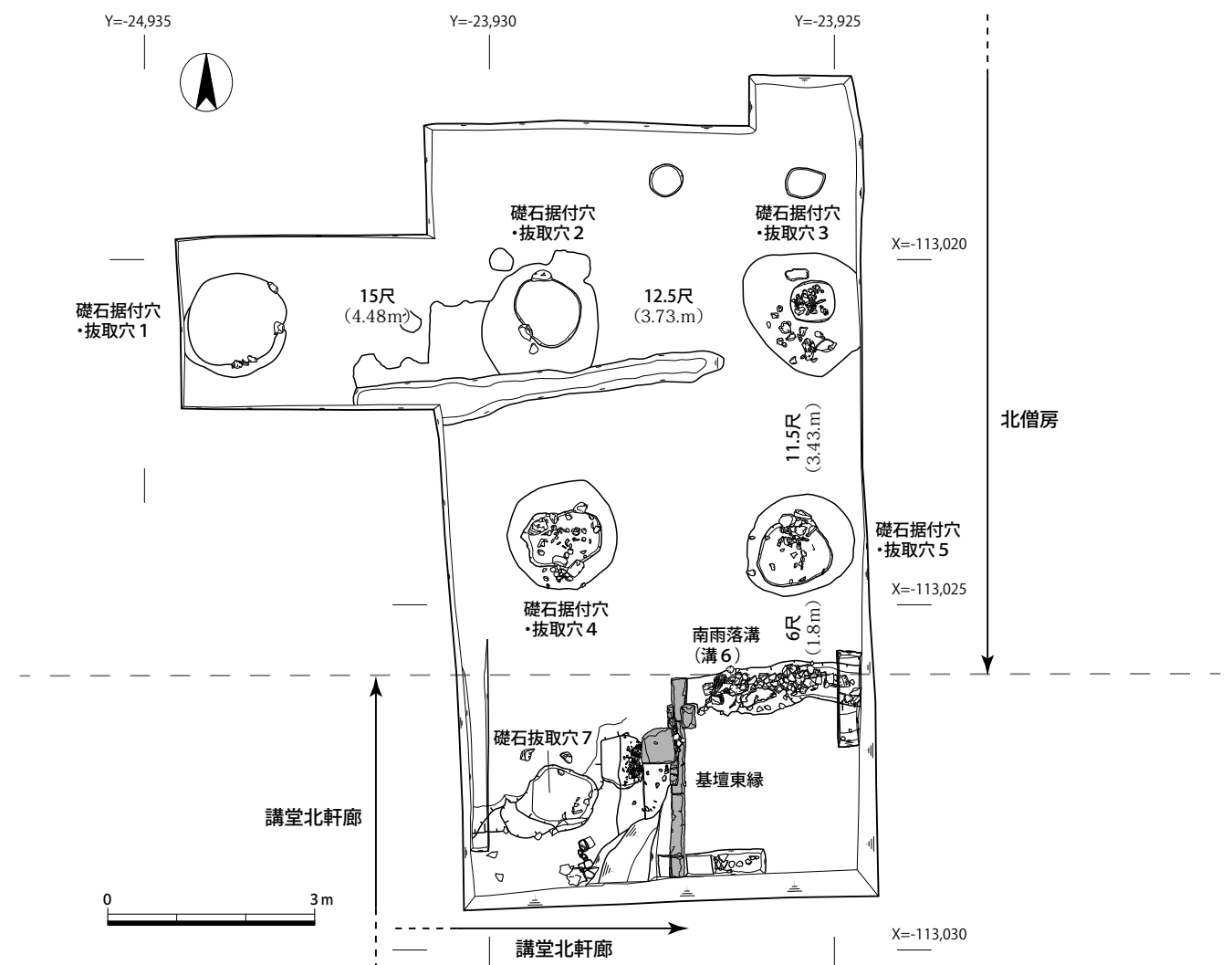


図4 調査区平面図(S=1:100)

3. 今回の調査成果について

(1) 北僧房の位置（図7・8）

西寺の北僧房の位置については、これまで東寺よりも約4 m北側に復元されていました。そのため、北側にある食堂院との間が狭くなり（約18.5 m）、1・10次調査での東僧房基壇東縁と7次調査での東小子房基壇西縁の間が6～7 mあることを勘案すると、北小子房（基壇幅10 m）が存在する余地が無く、西寺では北小子房は復元されてきませんでした。しかし今回の調査で、北僧房の南雨落溝及び柱の位置を示す礎石根固めを5基確認したことによって、位置が確定し、北僧房は西寺と東寺でほぼ同位置にあることが明らかとなりました。したがって、食堂院との間は22.5 mとなり、北小子房が存在する余地は十分にあり、伽藍復元図に見直しを迫る成果となりました。

(2) 北僧房の規模

南雨落溝は西端で凝灰岩列と接して北軒廊基壇との入隅をなし、溝北肩は北僧房基壇南縁を示しています。したがって、礎石据付穴・抜取穴5の中心からは基壇の出は1.8 m（6尺）となります。北僧房の梁行柱間は、規模が判明している東僧房の梁行3間（3.43 m・4.18 m・3.43 m）と同一規模と考えられ、梁行方向の基壇規模は、計18.24 m（6.1丈）であることが確定しました。

桁行の建物規模については、東僧房との関係から既に提示されている111.6 mであることに変化はありません。一方で、桁行の柱間3間を一房として復元した結果、伽藍中軸線を境に東西各5房となり、中央に廊下（馬道）は想定されていみせんでしたが、伽藍中軸線上に位置する礎石据付穴・抜取穴1と2の柱間は4.48 m（15尺）と同2と3の柱間（3.73 m（12.5尺））より広く、北軒廊との存在と合わせ、桁行の中央に廊下（馬道）が存在することが確実となりました。したがって今後、3間1房とする僧房の間取りについて再考する必要があります。

(3) 講堂北軒廊基壇

北軒廊東縁にあたる凝灰岩製の基壇化粧は、壇上積基壇を構成する地覆石、羽目石、葛石の石材が全て残されていました。都市化が進む京都市内において、平安時代の凝灰岩製壇上積基壇が葛石まで残されていたことは初めての事例です。壇上積基壇は、基壇の中で最も格式が高い基壇です。石材に使用される凝灰岩は、大極殿や朝堂院、内裏など、当時、国家の中枢部でのみ使用される貴重なものであり、同様の基壇を持っていた平安宮内の基壇建物を具体的に考える上でも重要です。

また、葛石が残っていたことから、軒廊の基壇高が0.5 mであることが明らかとなり、削られて残っていなかった北僧房の基壇も同様の高さがあったことがわかります。一方、これまでの調査で北軒廊と繋がる講堂の基壇高は、1.3～1.35 mであることが判明しており、0.8 mもの高低差が生じます。北軒廊の長さは、8.3 m（講堂基壇北縁と北僧房南縁間の距離）と短く、講堂との取り付けについては、39次調査で判明した東軒廊の登り廊下とは異なり、階段であったと考えられます。

なお、基壇の幅については、東縁基壇羽目石外側を伽藍中軸線で折り返した8 mとなり、柱間については、礎石抜取穴7中央から折り返した4.48 m（15尺）となります。

以上のように今回の調査では、北僧房の位置が確定したことで、西寺にも北小子房が存在する可能性が高くなり、これまでの伽藍復元図を見直す必要がある成果が得られました。さらに、講堂北軒廊東縁において、凝灰岩製の壇上積基壇を構成する石材が完全に残っていたことから、基壇高や講堂との取り付きが判明し、失われた西寺の伽藍の姿を立体的に捉えることを可能にする極めて重要な成果といえるでしょう。



写真1 調査区全景（北東から）



写真2 北僧房南雨落溝と講堂北軒廊基壇東縁（北東から）

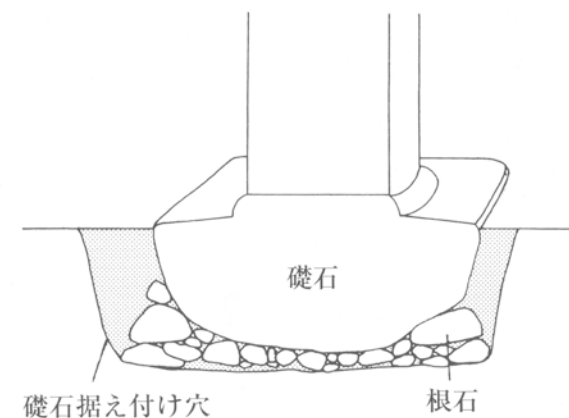


図5 礎石据付状況模式図
（『古代の官衙遺跡』奈良文化財研究所、2003より転載）

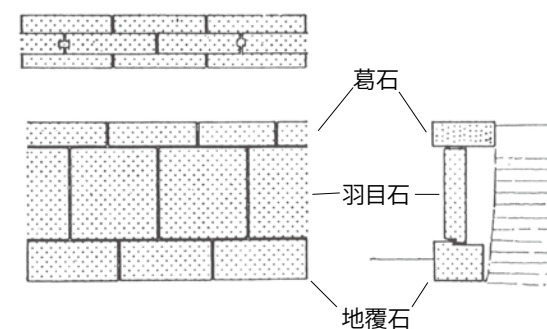


図6 壇上積基壇模式図
（『古代の官衙遺跡』奈良文化財研究所、2003より転載加筆）

☆今回の発掘調査を動画で公開します☆

●京都の文化遺産 YouTube

文化財の現場からシリーズVol.3

「お坊さんが住んでいた建物が見つかった！

～史跡西寺跡の発掘調査～」

<https://youtu.be/BgZL9f2jmk4>

（字幕設定オンで解説を御覧頂けます）

●京都の文化遺産 HP

<https://kyoto-bunkaisan.com/news/1789.html>

●京都の文化遺産 Facebook

<https://www.facebook.com/kyotsunagu>



写真3 北軒廊基壇東縁（東から）

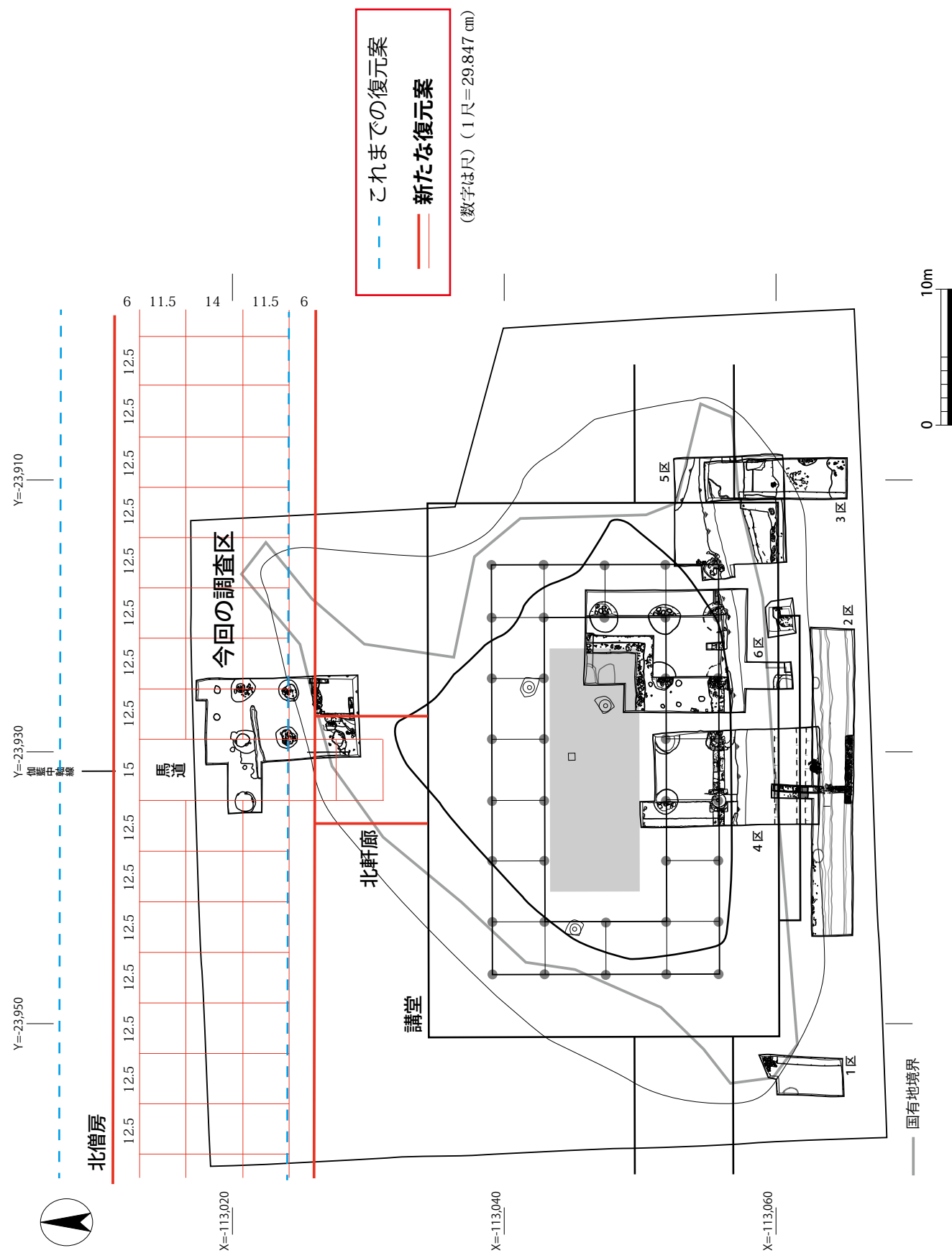


図7 新旧復元案 (S=1:400)

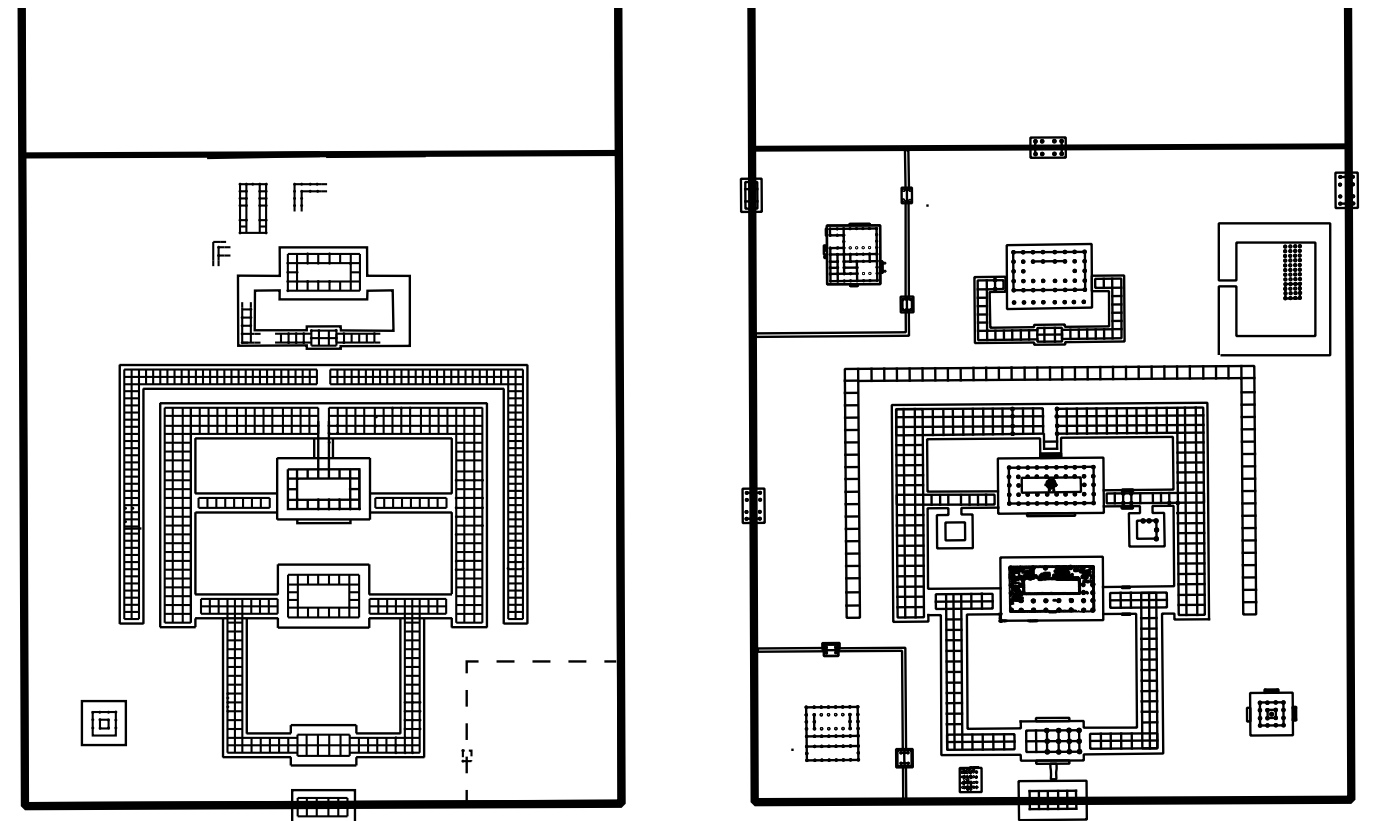


図8 西寺(左)と東寺(右)伽藍復元案

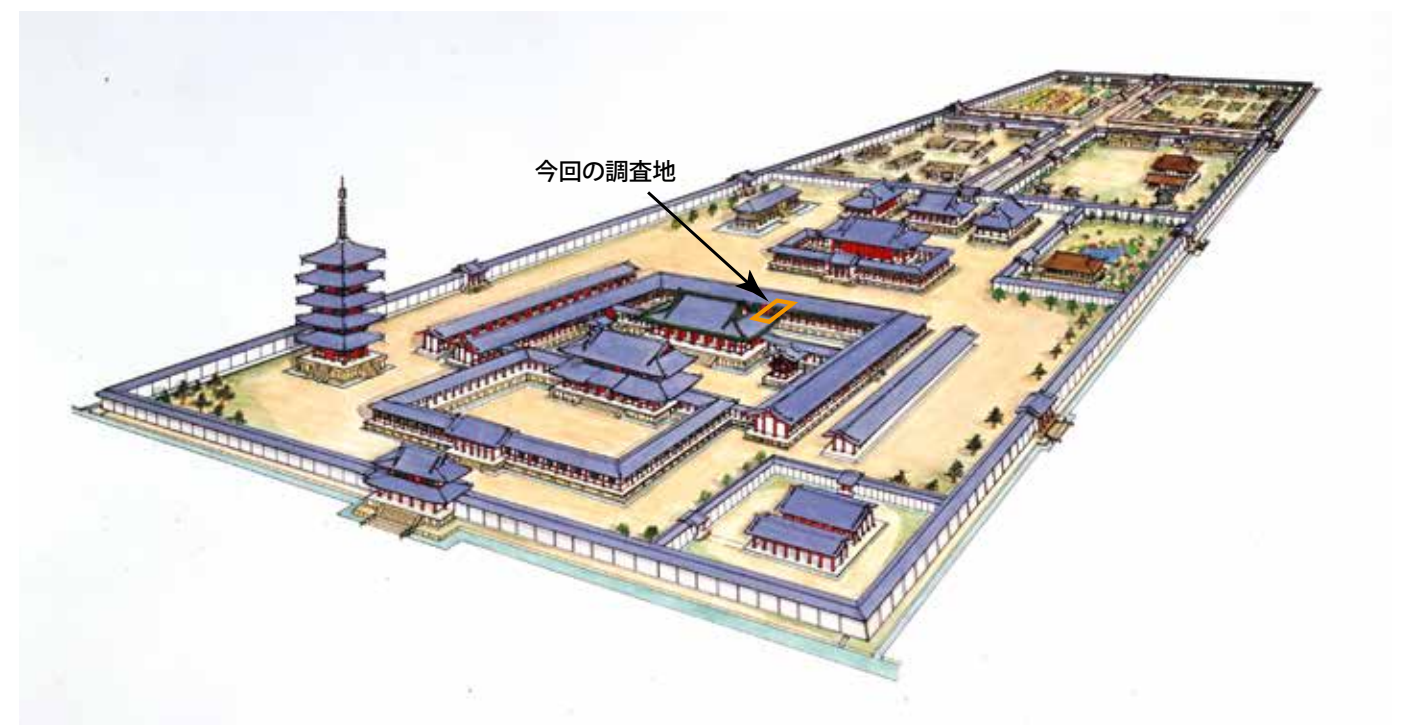


図9 西寺伽藍イラスト (画：梶川敏夫)